

馬酔木

池松 孝子

十代も終わる頃、堀辰雄の「浄瑠璃寺の春」を読んだ。その書き出しに「一種のあこがれを持つていた馬酔木の花を大和路の至る所で見ることができた」とあった。思い立って友と浄瑠璃寺を訪ねた。今治の法華寺の境内の馬酔木も見事だと聞き訪ねてみたいとも思ったが、女子大生の事、堀辰雄の方に惹かれて浄瑠璃寺を訪ねたのだ。

門を入ると、その先に門と並ぶ高さの馬酔木が見える。堀辰雄は、この馬酔木の花を「ふっさりとした一かたまり」と表現し「どこか犯しがたい気品」とまで言っている。

浄瑠璃寺には若い女性の姿が多かった。馬酔木の花が増えると浄瑠璃寺に人が増えるというが、その通りだった。浄瑠璃寺の所在地は京都府木津川市だが、地理的には奈良の東大寺からも歩けなくもない距離だった。またこの辺りは「当尾の里」と呼ばれ、鎌倉時代からの石仏が点在する。中世から近世には興福寺の末寺だったが、明治の廃仏毀釈の混乱で西大寺の末寺になった。

馬酔木より低き門なり浄瑠璃寺

水原秋櫻子

馬酔木は日本固有種のツツジ科アセビ属で常緑の低木。名は馬が葉を食べれば毒にあたり酔ったようにふらつくことからついたといわれる。その毒性はアセボトキシンを含み、誤食すると嘔吐や痙攣を引き起こす。奈良公園の鹿は他のどんな木を食べても馬酔木だけは残すという。

寒さ、大気汚染、潮風、乾燥に強い。その毒性の故だろうか病害虫に強い。さらに手をかけずに育てられることから庭木としても大変人気がある。白、ピンクの小さな房になった花をつけ、また一年中、緑の葉を鑑賞できることなどが愛される所以だろうか。

「万葉集」には馬酔木を詠んだ歌が十首ある。早春から咲き始める梅とはまた違った潔さを感じるのは万葉人らしい。ところが平安時代には詠まれなくなる。春の花としては地味だったからだろうか。水原秋櫻子の「馬酔木」を出すまでもなく明治以降、俳句の隆盛とともに再び見直されるようになった。